

2018年11月18日 経済学部 国語基礎学力型

〔一〕

問1	1	2	3	4
	はやし	舞台	そうごん	徹底
	5	6	7	
	妥協	達成	浸透	
問2	ア			
問3	ウ			
問4	オ			
問5	相対			
問6	これを知っ			
問7	イ			

〔二〕

問1	1		2	
	素描		対照	
問2	問3	問4	問2	
エ	オ	イ	エ	
問6		問7		問8
もちろんと		弾性に富む		エ

〔三〕

著者によれば、モラトリアムとは「若者の、身体的には大人でありながら、一人前の義務や責任を免除されている状態」のことである。現代社会は、若者にモラトリアムを保障するゆとりを失っているが、答えのない問いにじっくりと向き合いアイデンティティを確立していくための準備期間、「社会はどうあるべきか」といった公共的な問いに取り組む期間が若者には必要だと著者は述べている。

私は、誰にでも一定期間のモラトリアム状態は必要だ、という筆者の考えに賛成だ。しかし、現代の大学生たちが就職活動を背景に「じっくりと悩むヒマ」を保障されていない状況を、筆者が問題視している点には異論がある。なぜなら、私自身は、中学時代から高校時代にかけてモラトリアム期を過ごしたという意識があるからだ。「自己とは何か」「人はなぜ働くのか」といった問いについてじっくり思い悩んだからこそ、自分と社会の関わり方として大学に進学し、その後就職するという道を選べたのだと思う。

もちろん、人によってモラトリアムの時期は異なるだろう。大学で知り合う人たちがモラトリアム状態にあることを非難するつもりはない。しかし、著者も、モラトリアム期は「ないと人生が貧しくなるが、長く続きすぎても苦しい」と述べているように、私にとってのモラトリアム期は終わったと考えたい。大学時代は、明確な目標に向かって積極的に行動する時期にしたいのである。(587字)